

「日中植林・植樹国際連帯事業」清華大学学生訪日団第1陣 参加者の感想（抜粋）

北海道コース（1・2号車）

○今回の視察、交流では収穫が多かった。環境保護、防災、減災について認識を新たにした。これまで中国の地方などで都市の緑地問題を解決する際、環境保護ではなく、経済効果が優先的に考慮されていたと思う。周りの友人に環境保護意識を伝え、中国で以前から提唱されている「自然豊かな山こそ宝の山」という考えを正しく認識して行動に移すよう、皆に呼びかけたい。地震対策や火事の避難など、災害時の自助知識は中国でも学んだが、地震シミュレーターで実際に体験したのは初めてだった。今回の学習で、災害時に自分で生き延びるノウハウを確かなものにすることができた。

中央大学と北海道大学での交流では、日本と中国の学生の勉強方法は異なるが、学業の理想は同じだと感じ、お互いの長所で欠点を補い合って、共に進歩していくべきだと思った。

今回の訪問で、私は日本の学生と友情を深めることができ、中国と日本が国同士で友好的な交流を続けていってほしいと思った。両国が手を取り合って、世界の平和と発展を推し進めるべきだ。

○来日前までは日本に対して言葉にしがたい感情があったが、今回の訪問で日本に対する尊敬の念が生まれた。自然条件の制約があっても、日本の発展は依然としてスピードもパワーもあり、環境保護、持続可能な発展の追求、防災減災の分野で効果を上げている。手抜きしない努力を、中国は見習うべきだ。経済の急速な発展により、中国の多くの都市で環境、資源問題が発生している。日本も、資源、環境、防災分野などでの経験を多くの国とシェアするとよい。

日本の社会で特に印象に残ったのは、日本人が礼節を重んじることで、そのため日本はあらゆる面で、整然と管理されている。公共施設も細部まで行き届いていて、規模が小さくとも機能を完備しているのが特徴である。都市計画も、人口密度が高いにもかかわらず、きれいで整然としており、家屋が密接していても窮屈な感じはなく、過密でも、まるで正装している人のような風格が感じられた。

触れ合った日本人は皆、仕事や命に対して情熱を持っているという印象を受けた。担当の通訳、日中友好会館の職員から、地下鉄の白髪交じりの高齢者、水再生センターで解説してくれた背筋が伸びてかくしゃくとした職員まで、日本人は真面目に仕事をし、礼節を重んじて、いつも笑顔であった。その真面目さで仕事を全うすると同時に、意欲にあふれた気持ちを持ち続ける。このことは、心に刻む価値がある。一生懸命、真面目に生活していかなければならない。

○1. 今回の活動に参加して初めて、都市の緑化は住民の娯楽のためだけでなく、クールアイランド効果や減災の機能をもつことを知った。また、環境テクノロジー専攻の学生として、これまで中国の汚水処理場をたくさん見学してきたが、こんなに環境の良い処理場は見たことがなかった。今回見学した水再生センターは臭いがほとんどなく、わざわざ蓋を開けて水質を観察させてくれたが、そのとき以外は蓋をしているし、汚臭除去システムもあるため、処理場の環境はよいに違いない。実際、砂町水再生センターで用いているA20法は、特段先進的な方法ではなく、中国の多くの処理場でも採用されているのだが、今まで見学した処理場では汚臭がこのようにちゃんと抑えられてはいなかった。

2. 日本の環境防災教育は素晴らしい。札幌市民防災センターの体験型プログラムは大変興味深かったし、5歳以上の児童は毎年学校の課外学習で来ていると聞いて、このような遊びの中で学ぶ体験プログラムなら、子どもも喜んで防災知識を学べると思った。汚水処理場の見学でも、部屋の壁に貼ってある児童が描いた処理場の絵を見て、水再生センターでも定期的に児童が見学に来て、処理の過程を解説する活動

があるとわかった。このような教育はとても重要だし、そこに臨場感を持たせて楽しくするのは簡単ではないが、日本の官公庁はうまくやっていると思った。

○ (1) 防災関連の意識

日本では、住民が地震を身近なものだと感じていて、地震はいつでも起きる可能性がある、という心の準備ができています。しかし中国では、多くの人々が、地震はめったにない、生活から遠い出来事だと考えている。このような考え方の違いは、防災面での積極性や実際に災害が起きたときの対応に影響する。

(2) 防災教育

日中両国とも防災館を建設し、住民が地震などの災害をシミュレーターで体験し、防災知識を学んでいる。

①中国の防災館の規模はもっと大きいですが、数は少ない。日本は反対に、施設の規模は小さいが、広範囲に点在している。

②日本は人口が少ないので、皆がシミュレーターで体験する機会を持てるが、中国は人口も多く、同じような教育を普及させるのは難しい。

③日本の防災センターは娯楽性を強調しているが、中国の防災館は厳粛な雰囲気だ。

○日本人は気丈に災害に立ち向かっていく勇気と決意を持っている。地震や津波などの自然災害発生時に、どうやって危険から避難するかを子どもの頃から学び、訓練し、大災害が起きたとき、国民は被災者が苦難を乗り越えられるよう、物心両面で援助し、励ます。このような意気を見習うべきだ。

日本人は厳格に秩序を守る。どんな場所でも自覚して規則、規律を守り、列に並ぶことから仕事の些細な点までも、日本人が自制していることがわかる。社会の運営は個人が自制して秩序を守ることに委ねてはいけなさと考えていたが、今回、日本人を見て考えを改めた。

日本人の他人を思いやる、人に迷惑をかけないという気持ち。初日から、あらゆるところで身体が不自由な人のための設備を目にした。公共の場では人に迷惑をかけない。時間に遅れることはほぼない。これらは日本人の他人に対する思いやりの心の表れだ。

日本の素晴らしい自然環境。かつては今の北京のようなスモッグに包まれていたが、現在の日本はそのモンスターを飼い馴らした。数年後には中国でも毎日新鮮な空気を吸いたい。

宮城コース (3・4・5号車)

○日本での植樹活動は、環境保護の理念を行動に移しており、言行一致または行動が上回っており、見習うべきだ。防災分野の視察では、日本の災害被害の甚大さ、また各所で積極的に対応していることを身を以て感じ、感動した。中央大学、東北大学との交流やキャンパスツアーでは、日本の学生は細やかできちんとしていると感じたが、どちらも学ぶべきだと思った。

日本と中国には違いもあるが、肌の色が同じで、日本の学生との交流では親しみを感じた。日本も中国も前向きに発展している国で、どちらの学生も情熱を持って生活し、真面目に学業に励んでいる。日本の学生は生活の細部にも気をつけていて、本当に感服する。特に他人を思いやって小さなこともおろそかにせず、自分に対し責任を持っている。また、礼儀正しく、礼節の国だと感じた。謙虚さ、友好的な姿勢、礼儀や尊敬の念が、いつも日本人の血の中に流れている。

自分の交流の経験、日本の学生と話したこと、日本のキャンパスの美しさを皆と共有したい。

○植樹活動は環境保護の重要性を伝えるものであり、中日友好のシンボルでもあり、また緑化を重視する

よう気付かせてくれた。日本では東京などで都市緑化を推進しており、公園を建設し、普段はヒートアイランド現象を緩和し、災害時には避難場所として活用する。中国の都市も東京を見習い、緑化と商工業用地のバランスを保ち、緑地をふやし、活力を高めることができるのではないかと。

防災の分野では、防災施設を見学したとき、多くの子ども連れの家族が防災・地震対策の学習に来ているのを見かけた。小さい頃から防災知識を学び、緊急避難意識を養えば、大災害が起きたときに、整然とスムーズに避難することができる。中国の小中学校でもこのような避難の知識を多く組み入れ、火事・地震の緊急避難訓練の回数を増やして、消火器などの使い方をマスターすることができないものかと思う。

その他、日本の街はきれいで、大通り沿いを歩いても気持ちがいい。周りの緑を大切に、都市環境を守り、皆が自分にできる形で都市環境に貢献している。

今回、意義のある交流活動、また日本の大学の特色が理解できる踏み込んだ見学の機会を設けていただいたことに感謝する。

○南蒲生浄化センターの津波でへこんだ跡、松島で津波の経験を話してくれたスタッフが深く印象に残った。災害の恐怖だけでなく、日本人の災害に対する素早い対応、また、万全の災害予防教育は学ぶべきだと思った。災害を未然に防ぐため、避難ノウハウをマスターすることで、災害時に行動力を発揮し、より多くの人の生命の安全を保障している。

中央大学、東北大学の見学では、現地の大学生と交流する機会が多くあった。交流してみて、勉強面では共通するところが多いが、生活では、就職観などを含め、かなり違っていると感じた。学校の制度やカリキュラムが違うためかもしれない。日本の大学ではグループディスカッションが多く、チームで勉強するという雰囲気強いが、中国では主に自習や2人組ということが多く、グループで一緒に勉強することは少ない。

○今回の訪日は感慨深かった。日本の自然、風土、人情、歴史、文化を深く理解することができた。きれいな街並み、厳密なゴミ分別、整然とした社会秩序、温かくて親しみやすく、礼儀正しい人々、どれも深く印象に残った。松島の見学では、大地震を経験したスタッフが当時の惨状を語ってくれた。大変辛い経験だが、冷静に話してくれた。これは多分日本の国民性だと思う。災難に遭遇しても毅然として生きる希望を持ち続けていた。中央大学、東北大学の学生との交流では、彼らの熱心さや尊敬の念を感じ、温かい気持ちになった。言葉の壁はあったが、活動を通じて友情を深めることができた。今回の経験で、今後の学習生活の中で、どんな困難にも果敢に、毅然と向き合っ、勇気を持って前進しようという気持ちになった。

日本と中国はともに偉大な国であると同時に、日本人は私たちが見習うべき特質をもっている。帰国後は、日本での見聞を家族や友人に伝え、微力ながらも日中友好のために尽くしたい。

○日本の緑化設計は素晴らしい。土地が狭く貴重な都市の中心に、広い都市緑化を計画しているが、中国の大都市では考えられない。手代木先生のセミナーで、緑地が普段は「クールアイランド効果」を発揮して、都市の気候を調節し、休憩・娯楽の場所を提供していること、災害時には避難所となって、津波や火災の影響を軽減し、防いでいることを理解した。緑化が果たす機能は計り知れない。

日本の国民教育は大変普及している。街で科学館の広告をよく目にしたり、立川防災館を見学して、日本の教育の普及水準に驚いた。中国の消防、ゴミ分別の教育は、往々にして形式だけになりがちだが、日本では実際に役立つものとなっている。また、細かいことだが、日本ではいろいろな施設の入口にAEDが設置されているのに注目すべきだ。このような心臓病患者の救急救命設備は中国ではあまり見ない。

帰国後は、以上の二点以外にも、すべては挙げられないが、日本での初めての温泉、中央大学、東北大学のキャンパスの様子、ショッピングなどの経験を中国の友人と共有したい。

中国は礼儀の国と自称しているが、たった7日間の訪日で、現代の中国より日本の方が礼儀を重んじていると感じた。今回の旅のよい思い出は、一生の宝だ。

○手本にしたいこと：日本の防災館はとても参考になる。理論と実践をうまく組み合わせて防災知識を普及させるよい方法だ。中国にも同じような施設はあるが、不便なところにあつて、普段個人では見学できないなど、制約が大きい。ゴミの分別収集も学ぶべきだ。中国にもゴミ分別の制度はあるが、実際には行われておらず、普及にも力が入っていないので、一般の人はどう分別したらよいかわからない。

異なる点：日本の緑化はとてもうまく行われていて、植栽も申し分なく、街もきれいである。中国はモバイル決済がもっと便利だ。

伝えたいこと：日本は優秀な国で、いろいろな手法を手本にできる。中国の発展は急速だが、経済発展と同時に、社会と文化のバランスの取れた発展や、目先の利益だけ考えて自然を犠牲にすることがないようにするのが重要なので、これらの面で日本に学ぶべきだ。

○今回の交流で印象深かったのは、日本が防災、特に地震と地震がもたらす二次災害の分野で卓越した努力をしていることだ。四川大地震を経験した四川出身者として、地震の前、まずはとにかく避難するなどの防災教育を全く受けたことがなく、地震が起きたときは混乱して茫然としてしまった。近年、四川や中国のその他の地域でも地震が頻発しており、防災教育はあるが、万全ではなく、多くの人の意識も低い。反対に日本では、防災活動・教育に力を入れており、生活の一部となっている。防災教育は型どおりの解説や避難訓練だけではなく、防災館の地震シミュレーター体験、知識のモニタークイズ、ビデオなどのように、実際の場面が再現され、楽しく且つシステム化された、万人向けのものでとてもよい。このような防災館に見習い、よりよい、遊びと教育を織り交ぜた方法にすれば、中国の人も、避難のノウハウなどをしっかりと記憶することができると思う。

他に、以前から聞いていたが、日本での細やかな心遣いは、実際に体験してみて、驚きとともに温かい気持ちになった。公共施設は、障がい者のニーズを充分考慮しており、基本的にどこにでも車椅子用の出入口があつて、公共交通機関には車椅子用スロープがあり、エレベーターの階層スイッチの横には点字があつて、その鏡の大きさも基準に適合している。私の大学で障がい者用設備の調査をしたことがあるが、満足のいくものではなかったし、他の場所でもそうだ。この点については日本に学んで、関連設備の建設を急ぎ、完備させるべきだ。この他、バスルームの蒸気で曇らない鏡、トイレ用の擬音装置など、数えきれない細やかな気配りが人を安心させ、心地よくさせて、生活の中の煩わしさや気まずさを解消している。

○立川防災館の視察が深く印象に残った。日本の家屋は耐震レベルが高く、東日本大震災でも死亡原因は、地震によって起きた火災・津波で、家屋自体は崩れていない。日本の防災教育はとても素晴らしく、子どもの頃から地震発生時にどうやって避難するかを学習していて、毎年1回大規模な訓練がある以外にも、普段から不定期に警報訓練も行っているのも、実際の地震時にすばやく対応できる。中国でも毎年1回、5月12日に訓練を行っており、特に四川など地震多発地域では地震に備える教育が重要になっている。2008年5月12日の四川大地震は多くの犠牲者を出した。多くが建物の崩壊によるものだ。また、安全意識や知識が不足していたため惨事になったケースもある。耐震建築と教育について、中国はさらに努力し、強化していかなければならない。しかし、嬉しい出来事もあつた。四川大地震の際、ある小学校では、全児童教職員が1分間で避難し終え、死傷者が一人もなかった。これには学ぶべきだ。地震後の救済では、

中国人も進んで手助けし、団結して「一地方で災難があれば、八方から支援する」精神を発揮した。東日本大震災での日本人の行動も同じように素晴らしかった。

中央大学、東北大学を見学した際、キャンパスをガイドしてくれた日本の学生はとても親しみやすく、熱心に、進んで交流してくれたし、聡明で素晴らしい気遣いだった。交流によって、日本の学生は礼儀正しく、謙虚だと発見した。今後も交流学習の機会を持ちたいし、是非中国にも来てもらいたい。